

六 歌謠に就いて

我が國上古の音樂には、宗教の音樂として神樂があり、軍樂として久米歌、吉志舞等があり、即興的に歌ふものとして歌謠があつたが、いづれも皆聲樂ばかりで、器樂といふものは一つもなかつた。實に日本民族はその原始状態に於いて聲樂的民族であつた。後になつて支那から進歩發達した形式的器樂が輸入されて、大いに器樂の用法にも熟練したけれども、それにも係はらず、支那のやうに純器樂として發達することを得ないで、何時の間にか、又聲樂化してしまつた。奈良朝や平安朝の初期には、支那の雅樂が純器樂として日本に入り、我が邦の上流社會を風靡した程の勢であつたが、平安朝の中期から、これが多少日本化して來ると、催馬樂や、朗詠や、今様のやうに、聲樂となつてしまつたのである。鎌倉時代から以後、室町、

江戸の時代に發達したものの例へば、謠曲、宴曲、小唄等も、悉く聲樂であることはよく人の知る所である。



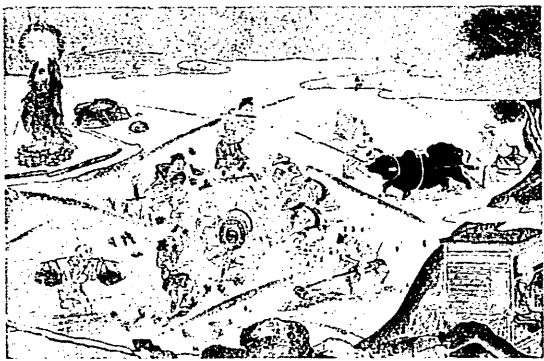
神樂

神樂は今も尙神事に行はれて居るが、今の所謂神樂といふものには二種類ある。一は宮中賢所、伊勢神宮その他の大社で行はれる極めて嚴肅なものであつて、音樂を主としてゐる。これに反して他の一は、鎮守の社等で行はれて、俗に「里神樂」又は「お神樂」と呼ばれる舞踊を主としたものであつて、多くは滑稽なものである。

宮中賢所や伊勢神宮などで行はれる正神樂を聴くと、實に神聖な嚴肅な形式的なものであつて、頗る進歩した儀式を備へて居るが、かやうな形式的なものが、原始的な古代から存在して居ようと

は考へられない。歴史を按じて見ても、これは平安朝中期の新作である。また里神樂の方も、その平民的なこと、舞踊的なこと、内容本位なこと、滑稽なこと、に於いて、原始的な所はあるけれども、今日行はれてゐる里神樂は、その技巧に於いて、また劇的仕組に於いて、決して原始的のものとは思はれない。殊に現時の里神樂に就いて感ずることは、そのやり方が頗る支那元代の劇に似通つてゐることである。

一體支那元代の雜劇は、日本へ入つて鎌倉時代の田樂や猿樂の一部の起原をなして居るものであるが、今日の里神樂は、恐らくこれ等の田樂などの影響を受けて發達



田樂 (起蘇寺山大者伯)

して來たものであらう。予は種種の方面の研究からして、日本上古の原始的な神樂の真相を推測して見るのに、少しも劇的な仕組などはなくて、頗る平民的な、舞踊本位な、滑稽的なものであつたに相違ないと思ふ。

戰陣に用ゐた歌舞、即ち軍樂にも、古くから種種あるが、その中最も名高いのは久米歌と吉志舞とである。前者は神武天皇が大和東征の時に、三軍を鼓舞するためにお作りになつたもので、頗る勇壯な舞が附いてゐる。その舞を久米舞といふ。後者は神功皇后が三韓征伐の御凱旋に際して出來た舞曲である。久米舞の方は、今もなほ毎年紀元節に宮中で行はれる。

上古には非常に澤山の歌謠があつたことは、記紀を見ると明らかである。いづれも皆、よく質實にその情緒を歌ひ出してゐる。これらは總べて即興的に詠歎したもので、しかも音樂的諧調を具へてゐる。

たのである。

それが中世になつて、形式的に發達するに従つて、二途に分れて來た。その一は、どこまでも音樂として取り扱つて行かうとするものであつて、これは純然たる聲樂となつてしまつた。さうして中世の歌謠となつたのである。その二は、音樂を離れて、文學として發達して來て、五七調の長歌や三十一文字の短歌となり、人人はこれを讀み又は見て、心に樂しむといふ風になつてしまつたのである。

(田邊尚雄—日本音樂講話)

田邊尚雄
音樂評論家。東京の人。國學院大學教授。東京帝國大學物理科出身。明治十六年生まる。